

詩時評

第26回

希望の源泉としての詩

松本衆司

「希望学プロジェクト」を立ち上げた玄田有史の「人はどんなに不確実な将来であっても、そこにひと筋の光明さえ見出せば、挑戦すべき対象として、希望をもつことができず。また、先行きがある程度わかっただとしても、依然としてまだ見えていない何かを期待できるとすれば、希望はもてるのです。『見えてないようで見えている』。『見えているようで見えていない』。想像力をかき立てる、どっちつかずの両義的な状況。それが、豊かさや人間関係と異なる、もう一方の希望の源泉なのです。」（『希望のつくり方』岩波新書）詩作もまたその見えないものを見ようとする営みとして、希望という言葉と無縁ではない。しかし、ミャンマーの悲劇があ

る。ウクライナは戦地と化した。この愚かな所業は希望や暮らしを踏み躪る暴挙だ。

富上芳秀詩集『言葉遊びの狼場』（詩遊社）を読む。「舐めると唾液はなにぬねの」を引く。

唾液には薬効効果があると／母は私の傷口を／ペロペロと舐めました／ナメクジくじれ／柔らかい茎を舐め／菊を舐め／禁じられた禁断の芯に／刺激を与えて／硬く天までたちつてと／なにぬねねぶれば濡れそぼち／なにぬね根元にさしすせそ／そろそろ露骨にらりるれろ／れ口れ口歴史にかきくけこ／困ったところははひふへほ／まめにこまめに働いて／ますますもえるまみむめも／悶え燃えますもる肌脱いで／散らしてもらおう桜吹雪／遠山桜にしんねりと／しなだれかかる枝垂桜は／いつのまにか／夜の妖艶な姥桜／ちるちるみちる血が満ちる

富上芳秀は人間の生理と理性と感情の織り成す生々しい現実の奥に分け入り、独自の詩的実験を続け、詩の個性を磨いてきた詩人である。十五冊目となる今詩集は言葉遊びを実験のテーマとするが、そこに滲み出す人間味がそこはかとなくかなしい。

河津聖恵詩集『綵歌（ふらんす堂）』を読む。「紅の匂い―南天雄鶏図」を引く。

絵師とは画業の果てに死ではなく／闇に燃えおちつづける／熱い火種となることを選んだ者／見よ 彼は今もここにあかあかと生きている／漆黒の脚で大地をふみしめ／虚空をふりあおぎ／軍鶏はちからづよく言葉をする／彼方でまなざしに照応する赤色巨星は描かれていない／外の外の宇宙に／それはいまもふくらみ赫き いのちを渴仰する／わずかにひらく嘴が不思議な笑まいを含み／三百年の空気を共振させる／ふいに漆黒の尾が打ち振られ／中空から南天の紅がずつしりと呼びよせられた／鮮血――果てなくめぐるものに挑みつづけた軍鶏の／ついに あるいは／ふたたびの永遠の正午／無量の実と共に関の声をたかだかと上げるそれは／一瞬の戦争／あるいは天地開闢／気配に気づいた者だけが絵を「見る」のではなく／色を「聴く」／黒の身じろぎと紅の匂いに／（色は匂い 絵師はそれを神気と呼んだ）／抱かれながら／偽りの世にみずから旨い／軍鶏の生命にまなこを見ひらき／世の闇に生きる痛みをおしのべた／絵師のまなざしが／今いきものからあふれる光の辰砂に埋められてゆく

伊藤若冲の「動植綵絵」に収められた「南天雄鶏圖」への頌歌を悠に超えた現代詩人の挑戦である。他の詩篇もすべて若冲の絵、或いは若冲の時空に寄り添い、肉迫する。それはまさに「絵師のまなざし」の向こうを見、聴こうとする河津聖恵の「まなざし」の世界だ。その二重の「まなざし」に読者は魅せられる。或る劇作家の「能楽がその粋を誇つてゐた時代には、人々は明らかに耳で観、目で聴いてゐたに違ひない」という言葉を確信的に思い出す。絶妙な詩語の織り成す若冲の世界、現代詩の可能性はここにもある。

田中啓一詩集『弥生ちゃん』（詩遊社）を読む。「カサブランカ」を引く。

晩御飯のメニューに困ったとき／カレーを作るように／詩の書けなくなったときには／花を歌えばいい／最近になって訃報を知ったという／亡妻の友人から／フラワーアレンジメントが届いた／カサブランカを中心に／白い花々でまとめられていた／毎日の水やりをしていると／つぼみだったカサブランカの薄緑色のさやが／白色に変わり花弁が開く／その変化を見て二週間が過ぎた／最後のつぼみが開いて／花びらはもうじき茶色になっていきそうだ／十三歳のときに知り合ったという／友人は／

札幌の冬の校庭で／雪合戦に遊び興じた話を添えられた手紙に書いていた／／ほつたを赤くして／雪玉を投げている少女らの姿が／まぶたにうかんだ

亡くした妻を想う詩篇を花束のように束ねた詩集である。人は自分の顔を見ることはできない。私たちは伴侶と向き合うことで、そこに互いの顔や人生を映しているのかもしれない。さり気なく語られる妻への、或いはひとり女性の頌歌は限りなく美しい。

柴田三吉詩集『ティダのしおり』（ジャンクション・ハーベスト）を読む。

リュウキュウははるかな昔／リュウグウだつたかもしれない／アサトさんは／なにをバカなことをと笑つた／／そんな時代があつたのではないですか。死んだ者と生きている者 食べる者と食べられる者が なかよく暮らしていたときが。記憶のかすんだ場所に その面影が残っているんです。空と海が逆さになっていて。／／リュウキュウは 独立して リュウグウと名乗ってはどうぞでしょう。その下に 国をつけず ただのリユウグウ。そしてこの大海原から こつぜんと姿を消すんです。／／アサトさんは憐れむようにわたしを見／ふ

らあなくとう（バカなこと）言うなど嘲つた／／夢みたいなことを言う／ふりむん（バカもん）がいてもいいでしょう／死んだ者も生きている者もいて／食べる者と食べられるものもがいて／殺さなくて 殺さなくて／盗まなくて 盗まれなくて／／この世界の果てへ果てへと／ティダのこともって／広がっていくんです

どの詩を引くべきか迷つた。「辺野古の新基地建設強行に反対するため、鳥々の歴史と文化を学びつつ旅をしました」：、その詩人のあとがきの言葉は、無論、風土と人間の内奥への旅でもあつた。沖繩を知らしめる豊かな詩情と深い思索の一冊である。

青木左知子詩集『官界の行方』（滯標）を読む。「こんな時間もあつて」を引く。

カップへミルク色ひと匙ながす／かき混ぜる指先がクククツとわらう／可笑しもないことを／わらう／躍起になって掻き寄せたことは／一夜明けたら朝陽のなかで／くたびれていた／おどけ混じりのお伽噺／であつたのだ／／ころんと 白い／ 実なし／むなしの／ 虚貝／ 握る／／ 身を扶かれた記憶さえもたない白い虚ろに／潮のおとなど響かない／赤茶けて／かお

り飛ばして／自滅よそおうコーヒーの作意  
／寄り添ってくれるというのか／いやいや  
／ソーサーのうえは寒々／押しやる指先がク  
ククツとわらう／／ころんと 白い／  
虚貝／ 放す

詩集を一読して感心し、心魅かれた。八十  
代半ばまで詩を書き続けるその詩人の詩は、  
いずれの作品もユニークで尊い。「軽み」の  
中に秘められた切実な人の世と形容できるだ  
ろうか。そして、ふと、心に浮かんだのは能  
楽の卒塔婆小町の心模様だった。

中原道夫試論・エッセイ集『振り返ってみ  
たら、そこに詩が』（土曜美術社出版販売）  
を読む。「詩のお化け」についての一節を  
引く。

詩の原点は詩人の魂の発露であり、感動の  
伝達が詩であるということである。もちろ  
ん、詩は俳句や短歌と異なり、自己の内面  
や、社会性まで深く掘り下げて表現される  
べきものであるから、ただたんなる詠嘆や  
抒情だけであってはならないと思うのだが、  
「詩のお化け」は、詩人の肉声や人間が根  
元的に持たなければいけない感動まで排除  
し、言語至上主義に走り、難解という隠れ  
蓑に生きているのである。魅力のない詩か

ら大衆が遠ざかるのは当然である。

当時、図書館に非常勤で勤務していた中原  
道夫の「ーおい、神戸新聞がきたぞ／だれか  
が言った」で始まる「朝のひととき」という  
詩は、阪神淡路大震災後の人々の思いそのも  
のの詩として多くの人々の共感を生んだ。そ  
の詩人の卒寿を記念して刊行された来歴と生  
きる心を辿る貴重な一冊である。

山田兼士詩集『冥府の朝』（滯標）を読む。  
「カロンの舢」を引く。

天井が回転し／体が床に打ち付けられた／  
／データを保存し／トイレに行くために椅  
子を回転／そのまま足を踏み出したところ  
で／みごとにひっくり返った／リハビリ中  
であることを忘れていたのだ／／髄膜炎の  
高熱で倒れてから3ヶ月／中原中也の死因  
になった病気だという／命が危ういほど重  
篤だったことを／自分ではまったく覚えて  
いない／／家族や友人の声は聞こえなが  
／自分がどう答えたか覚えていない／煽や渦  
の塊のようなものが／ろうろうと流れ去り  
／その隙間を／小舟のような影が通り過ぎ  
た／／あれがカロンの舢／小舟に乗ったオ  
ルフェウがじつとこちらを見詰めていた／生  
死の境をさまよったにしては／呆気ない顔

末だ／／夢と現の妙な幻想も遠ざかり／生  
活の雑事が気になり始めたが／いまは／残  
された命を味わう時／もしかすると／この  
生は残像かもしれない／カロンの舢で去っ  
たものが見続けている／夢の欠片かもしれ  
ない

生死の境をさまよった山田兼士の臨死体験  
を書きとめた詩集である。十九年の秋、大阪  
文学学校事務局長の小原氏から「もうだめか  
もしれない」と、山田氏の病のことを聞いて  
いた。チューターとして同年代の誼を抱いて  
いた山田兼士の復活を心から祝したい。

宮城ま咲詩集『一品たりない居酒屋』（待  
望社）を読む。「べそり ぼそり」を引く。

うらがOK／おもてがOKなら／オールO  
K／というわけでもなく／わたしらには／  
奥行きがあつて／わたしらには／見えない  
部分があつて／本心なんかがあつて／だけ  
ど／時としてわたしらは／見えてる部分か  
すべてだ／おもわれたりなんかして／お  
もつたりなんかして／言えないことばが／  
いえないままだつたりして／洗ったお皿  
は／おもてが乾いて／うらの糸底にも水気  
がなければ／すぐになつて使えるけど／わ  
たしら、／うらでもおもてでもないところ

／雫がひそんでたりなんかして

「わたしたち／もつと遠くへ行きましよう」  
（「あおいまちの三月から」）と詩人は言う。

思慮も、勇氣も、愛も、もつと深いし、もつと遠いし、見えないところに真実があるのだ、と浅慕な価値観があふれる世の中に、宮城ま咲の詩は語りかけている。

中尾彰秀詩集『T A Oやかな地球』（溹標）を読む。「眼裏」を引く。

斜めの電線を雫が綱渡り／そのぐらいの小雨に限る／どこかの壊れかけのトユだろうが／必ず一定周期でタマが落ちて／何だかそれは眠気を醒ますべく／背をボンとたたいて／カツを入れている様に／あるいはある種の読経／繰り返しの途上／白々した魂が／宇宙の奥域古代よりの今のステージに浮上する／覚えておいて下さい／派手なこととは何にも要らない／人生の本物は物次元ならぬ／眼裏の出来事

そうかもしれない―とは、時空を超えた世界の呼吸のような律動への、読後の素朴な印象に導かれた私の感想のことばだ。不可思議な世界を哲学する詩人の、遙かな道を見る目から紡ぎだされた詩が並ぶ。

恭仁涼子詩集『アクアリウムの驕り』（人間社草原詩社）を読む。「小会議」を引く。

変わらない私を願うあなたと／変わりたいと願う私で／膝つきあわせて小会議／だつてさ／もし／もしも私があなたのために／鮭とばとかするめとか用意するよりかはさ／かわいくスノードームのクッキーなんて作って／召し上がれの方がよくない？  
／／あなたは言う／ほくはそもそもきみの家には行かないし／ひとつのバーチャリテイな個体として／在るだけだから／きみの側には在れないから／きみを「」せないから／／そっかそうなんだそれもそう／私を殺せないし、愛せないあなは／あるいは、離せないあなは／変わらないであなを愛する私をただ眺めて／乾きもんなんかをしゃぶっているだけってことか

多様な価値観や個性にあふれる人々の営みは、浅い流れの柵のようで、人はその現実の中に、不確かな自他の違和と妥協の感覚と感情に疲弊する。恭仁涼子はその違和の空気の漂う現実をこんなにさらりと、そしてコミカルに掬い取る。詩を読む楽しさがある。

詩誌の時評は中塚鞠子チューターの欄に譲

つたが、この間も多くの同人誌や個人誌を読む機会があった。夏山なお美個人誌「梨翠書」第一号のあとがきに、「在日三世として生まれた。日本語しかあやつれない。…この日本で、韓国人とも日本人とも言い切れないありのままの自分を表現したい。」生きることは葛藤することそのものだが、そこから掘り進め、探り当てた言葉は尊い。

寺田操個人誌『Poetry Edging』を数える。その「日々雑感」の一部を引く。

1968年12月18日、松永伍一「莊嚴なる詩祭（徳間書店／1967年）」を入手した。文学のとはぐちに立ったばかりに出会った本著は「きみの書いている詩が生命と同じ重さであるか、という発問」からはじまる。「詩は青春の文学」を拒絶し、「詩を商品に墮落させない」と、猛スピードで世界を駆け抜けた詩人たちを「影の詩史のニンフたち」と呼んだ松永は、早世した詩人たちの追跡を無言で促していた。

寺田操が本を手にしたその数年後、私も東京練馬上石神井の松永伍一の家を訪ねている。実はその時代のことをこの数日思い出し出していた。「東欧へ避難する人々の姿が夢に何度もあらわれて：ザワザワと落ち着きません。どうか御元気でー。」彼女の私信に共感する。